『古畑任三郎VSイカ娘』

杏羽らんす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『古畑任三郎ＶＳイカ娘』

【Ｎコード】

Ｎ１２３７Ｙ

【作者名】

杏羽らんす

【あらすじ】

古畑任三郎の今回の対戦相手は、海からの侵略者イカ娘――

アバン

【アバン】

古畑

「えー……イカスミ料理には様々な種類があります。

たとえば、イカスミスパゲッティ、イカスミのパエリアなんかは特に有名ですが、他にもイカの墨煮や、イカスミ汁なんてものもあります。

えーみなさん。これらのイカスミ料理を食べたあとは、口が汚れていないかきちんと確認してください。

歯につくと、平安時代の女性がやっていたお歯黒のようになって笑われてしまいますし、口のまわりが真っ黒になると、泥棒のヒゲのようだと笑われますんっふっふぅ。

ただし。

口を拭くときは、くれぐれも手では拭かないでください。イカスミは――」

事件じゃなイカ？

【ＡＭ　０時　海の家れもん前】

夜の海辺。
周囲は真っ暗だが、イカ娘のホタルイカの能力で明かりをとっている。
不思議そうな顔で辺りを見回す早苗と、少し機嫌が悪そうなイカ娘。

早苗「どうしたのイカちゃん、こんな時間に呼び出したりして……。はっ！」

大げさなアクションで身体をよじる早苗。

早苗「まさかイカちゃん、ついに私と結ばれてくれる気になったのね！　海辺で愛の告白。こんなロマンチックな演出をしてくれるなんて、感激っ！」

早苗、イカ娘に抱きつこうとする。

イカ娘「抱きつくなでゲソ！」

イカ帽子のピコピコで返り討ちにあい地面に倒れる早苗。鼻血を拭きながら身体を起こし、

早苗「うぅっ、イカちゃんのピコピコが心なしかいつもよりパワフルだわ。ああっ、イカちゃんイカちゃん！　これがあなたの愛の強さなのね！」

イカ娘「違うでゲソ！　そんなわけないじゃなイカ！　だいたい今夜は空が曇っていて明かりがないから、真っ暗すぎてロマンもなにもないでゲソ」

早苗「そうね、こうしてイカちゃんがホタルイカの能力を使って照らしてくれないと何も見えないわ。そうよ！　イカちゃんがいないと私は何も見えないの！　むしろ最初からイカちゃんしか見えない！　イカちゃぁあああん！」

イカ娘「だから抱きつくのはよさなイカ！」

早苗「ぐふー！」

再び地面に転がる早苗。

イカ娘「まったく。今夜は早苗に注意しておきたいことがあったのでゲソ」

早苗「ちゅう？　もー、いいよ……。イカちゃん、はい、チュー」

イカ娘「チューじゃなくて注意でゲソ！　くだらんシャレはやめなイカ！」

早苗「ああんっ！　もう、イカちゃん今夜は激しすぎるぅ！」

早苗、再三にわたるピコピコ攻撃に激しく悶える。

イカ娘「まったく……。早苗よ。私は今日の昼間におぬしがやった行為にはらわたが煮え繰り返っているでゲソ。イカっているのでゲソ」

早苗「えっ……そんな、イカちゃんを怒らせるようなことなんてしたかしら。えっとたしか今日は、働くイカちゃんをカメラで激写して、休憩中のイカちゃんに後ろから抱きついて、あとは厨房に忍び込んでイカスミスパゲッティ用のイカちゃんのイカスミを全部飲みほして」

イカ娘「じゅうぶん迷惑じゃなイカ！　――しかし今回はそれよりもっと許されない行為を早苗はしたのでゲソ」

早苗「な、なに……？」

イカ娘、早苗を指さしながら、

イカ娘「それは海を汚したということでゲソ！」

早苗「海を？」

イカ娘「そうでゲソ。私は、おぬしが昼間、海に向かって何か長い棒状のものを投げ込んで捨てているところを見たのでゲソ。海を汚すなんてイカんでゲソ！」

早苗「あ……ご、ごめんねイカちゃん！　あれはわざとじゃなかったの。イカちゃんのためにエビを釣ろうと思って釣り竿を投げたら、思ったよりも海の波が強くて持っていかれちゃって……」

考え込むイカ娘。

イカ娘「うーむ、私のためにエビを釣ろうとしてくれたのは良い心がけでゲソ。しかし海にモノを捨てたという罪に変わりはないでゲソね……」

早苗「悪気はなかったの。イカちゃんごめんね、お願い……許して！　私、イカちゃんの言うことなんでもきくから～！　命令してぇ～、お願いイカちゃぁあああん！」

早苗、イカ娘の足にしがみついて懇願する。

イカ娘はすぐにそれを振り払う。

イカ娘「それはおぬしの願望じゃなイカ！」

早苗「うぐっ！　ああん、いつもよりイカちゃんのツッコミが強いのも愛のムチなのね！　イカちゃん、私の罪が許されるまでいくらでも怒ってー！」

早苗、イカ娘に抱きつこうと走り出す。
逃げるイカ娘。

イカ娘「お、追いかけてくるなでゲソー！」

早苗「イカちゃああああああん！　待ってー！」

イカ娘「はぁ……はぁ……、これは逆にまずいことになったでゲソ……！　なんとかして早苗をこらしめないと……」

イカ娘、監視台を見つける。

イカ娘「――あれはいつも悟朗が座ってるビーチの監視台でゲソ」

イカ娘、監視台にのぼる。

早苗「イカちゃん！　私も監視台にのぼるわ！　待っててね、イカちゃん！」

イカ娘「くらえでゲソ！」

イカ娘、監視台の上から早苗にむかってイカスミを吐く。

早苗「きゃっ！　なにこれっ……！？　目が開かない！」

早苗、顔にかかったイカスミを舐める。

早苗「こ、これはイカちゃんのイカスミだわ！　ああん、イカちゃんのイカスミが生で味わえるなんて感激！」

早苗は喜び、動きを止める。

イカ娘「今でゲソ！　ボディープレスをお見舞いするでゲソ！　とりゃあー！」

イカ娘、早苗に向かって飛び降りる。

早苗「イカちゃんのボディープレス！？　いいわよ、イカちゃん！　さぁ、私の胸に飛び込んでき――うぐっ」

イカ娘「――？　なんか変なうめき声が聞こえたでゲソ。いつもの早苗ならもっとギャーギャーわめくはずなのに……ま、まさか！」

イカ娘、早苗の様子を調べる。

早苗「――――」

イカ娘「し、死んでるでゲソ！？　しかもこんなに血を吐いているじゃなイカ！　鼻血まで……ってこっちは興奮した早苗が勝手に出したものでゲソね。ど、どうして……私のボディープレスくらいであの異常な生命力を持つ早苗が死ぬはずが……はっ！　まさか……」

イカ娘、自分の腕輪を確認。

イカ娘「――しまったでゲソ！　腕輪での体重調整を間違えていたでゲソ！　一キロに設定したはずが百キロになっていたでゲソ……」

早苗、苦しそうに上半身を起こす。

早苗「――……イ、イカちゃん……」

イカ娘（！　まだ息があるでゲソ！？）

早苗「もう……私は、死んで……しまう……わ。けど、イカちゃんへの愛をここに記させ……て……」

早苗、這って監視台に近づく。監視台のパイプの足に、字を書く。

早苗「ここに、イカちゃんと私の相合傘を……」

イカ娘（な、なにを書いているでゲソ！　――そういえば！　刑事ドラマで見たことがあるでゲソ。被害者が死ぬ間際に、刺されたときの自分の血やその場にあったもので犯人の手掛かりを残すやつでゲソ！　たしか……そう、ダイイングメッセージでゲソ！）

早苗「イカちゃん……らぶ。――うっ」

早苗、息絶える。

イカ娘「こんどこそ完全に死んでしまったでゲソ。ああ……私はとんでもないことをしてしまったでゲソ。しかし……バレたら逮捕されてしまうでゲソ。そんなことになったら、ただでさえうまくいってない地上の侵略がどんどん遠退いてしまうじゃなイカ」

イカ娘、考え込む。

イカ娘「こうなったら、証拠を隠滅するしかないでゲソ……。まずは海の水をかけて血を消し――イカんでゲソ！　海の水を汲む道具がないでゲソ！　くー、すぐそこに海があるのに、水を運べないなんてもどかしいでゲソ！　しかたない……こうなったらとりあえずイカスミをかけて塗りつぶすでゲソ」

イカ娘、早苗のダイイングメッセージ（？）にイカスミをかける。

イカ娘「これでＯＫでゲソ。しかしここだけイカスミがかかっていたら注目されてしまうでゲソね。よし、そこに落ちてるゴミとか、砂浜や海の家にもスミをかけておくでゲソ。そして朝になったらみんなと一緒に掃除するふりをして拭き取れば証拠隠滅でゲソ」

イカ娘、手当たり次第にイカスミを吐いていく。

イカ娘「ふー、どっと疲れたでゲソ。誰かに見つかる前にさっさと退散するでゲソ……」

捜査開始

【ＡＭ　７時　海の家れもん周辺】

海辺。
早苗の遺体の第一発見者である悟郎から事情を聞いている今泉。
そこに古畑が到着する。

今泉「あ、古畑さ～ん！　こっち、こっち！　このビーチの監視台のふもとですっ」

古畑「はいはいはい……そんな騒ぐんじゃないよ。えー、あーらー、これはーお若いのにお気の毒だ」

古畑、ハンカチを取り出し、口元にあてながら遺体の様子をみる。
今泉は手帳を取り出して読み上げる。

今泉「被害者は長月早苗さん。十六歳。この近所に住んでいて、倉鎌高校の一年生のようですね。死因は腹部を重たい物に押しつぶされたことによる圧迫死。凶器は見つかっていません」

古畑「なーるほどー……。ねえ、この仏さん、殺されたっていうのにずいぶんと幸せそうな顔してるねぇ……。言っちゃ悪いけど、なんていうかさ、君みたいなヘラヘラ顔だよ」

今泉「たしかに、そうですね……って、僕のどこがヘラヘラしてるんですか！　もうやめてくださいよ古畑さぁん！」

古畑「それに、なーんか真っ黒い液体がそこらじゅうに飛び散ってるねぇ……。なんだろうこれ、血じゃないよねぇ……。ちょっと今泉くん」

古畑、落ちていた枝を手に取り、その先に液体をつけると今泉の口につっこむ。

今泉「はい――ってぶぇっぺっぺ。ちょっとなにすんですか！　酷いじゃないですか！　うぇー砂まで混じってる」

古畑「どんな味がするー……？」

今泉「えっと……美味しいです！」

古畑、今泉のデコを叩く。

古畑「どんな味かって聞いてんのー……ぉ」

今泉「これは……イカスミです！」

古畑「イカスミ……」

悟郎が今泉たちに声をかける。

悟郎「あの……今泉さん。こちらの方は……」

今泉「あ、この人は警部補の古畑さんです！　どんな事件も解決しちゃう名刑事なんですよッへへへ！」

古畑「お前は余計なこと言うんじゃないよっふぅっふ～」

嬉しそうに今泉のデコを叩く古畑。

今泉「痛てっ。もー古畑さんおデコ叩かないでくださいよーっ」

古畑「まったく。――あ～……すみません、どうも失礼しました。え～、捜査一課の古畑と申します。いやね、えーと、ＳＭＡＰの事件。解決したの私なんですよ」

悟郎「えっ。……ああ！　そうなんですか、ニュースで見ましたよ。いやー凄いなあ」

古畑「……あなたはーぁ、第一発見者の？」

悟郎「ライフセーバーの嵐山悟郎です。今朝、見回りをしていたら彼女が倒れているのを発見して。近寄ってよく見てみたら、亡くなっていたんです」

古畑「そう、ですか。ちなみに悟郎さん。あなたは、この方……ご存じで？」

悟郎「ああ……はい。よくそこの海の家で顔を合わせますから」

古畑「お友達のような関係で？」

悟郎「そうですね」

古畑「あの、失礼ですが、それ以上のご関係はー……？」

悟郎「それはありません。俺は千鶴さん一筋……いえ、他に気になっている方がいますから」

古畑「そうですかー……それはどうも失礼しました。あー、今泉くぅーん」

今泉「はいっ！」

古畑「犯行時刻はもう出てるのー……？」

今泉、手帳を確認しながら、

今泉「えっとですね、はい。おそらく昨晩。夜中の二十三時から日付が変わって二時までの間じゃないかと」

古畑「ふーん……」

古畑、悟郎の方に向き直る。

古畑「あのぅ、悟郎さん。形式的なものなのでどうかお気を悪くしないで頂きたいのですが、あなた昨晩はどこで何をしていましたか」

悟郎「俺を疑っているんですか！？」

古畑「いえいえ、とんでもなぁい！　こういう事件の場合は少しでも手掛かりが必要でして。どなたにも聞くことですから」

悟郎「そうですか。えっと……昨晩は、筋トレをしていました。で

も日付が変わる頃にはもう寝ていたと思います」

古畑「それを証明できる方は」

悟郎「いちおう母と同居しているので、母が……。けど、親類の証言はあまり意味がないんでしたっけ」

古畑「証言力としては落ちますがー……参考にはなります」

悟郎「そうですか……」

古畑「え～、ところで……。なあ、今泉くん。さっきから近くでこっちを見ている女性たちはー？　あまり現場にやじ馬を呼ばないようにって言っただろう」

今泉「古畑さん。あの子たちはですね、すぐそこの海の家で働いている子たちなんですよ。どうやら被害者の友達だったみたいで」

古畑「へぇー。そう、なん、だ……。ちょっと呼んでみて」

今泉「はい！　ちょっと君たち、こっちへ！」

千鶴「はい……」

千鶴、栄子、渚の三人が深刻そうな顔でやってくる。

今泉「彼女たちが、海の家れもんの従業員さんです。海の家は相沢家のお嬢さんたちが切り盛りしてるようですね。まず長女の千鶴さん、次女の栄子さん。それとこちらはアルバイトの渚さんです。アルバイトの子は彼女ともうひとりいるようなのですがまだ来てないみたいです。あと、たけるくんっていう長男もいらっしゃるんですが、彼はまだ小学生なので海の家の中で待機してもらってます」

古畑「なるほどー……。どうもー、古畑です。はじめまして」

千鶴「どうも……」

栄子「早苗ぇっ！　どうしてだよ！　どうして早苗がこんな目に……！」

古畑「お察しします。……あなたたちも、悟郎さんと一緒に遺体を発見に？」

千鶴「いえ……。悟郎さんが遺体を見つけて警察に連絡している最中に、ちょうど私と妹の栄子ちゃん――いえ、栄子が海の家に到着

して。そのとき悟郎さんが声をかけてくれたんです」

古畑「そしてその後にアルバイトの渚さんがきた？」

渚「……はい。もう混乱してしまって、何が何だか……」

古畑「そうですか。あのーみなさん、被害者の長月早苗さんの交友関係について何かご存じありませんか。とくに、恋愛関係で」

千鶴「恋愛関係ですか」

古畑「ええ、早苗さんは高校一年生と非常にお若い。それになんといいますか、こうー……可愛らしい方ですからねぇ。恋愛関係のもつれという線はじゅうぶんに有り得るかと」

栄子「早苗には彼氏はいませんでしたよ」

古畑「では交際まではいかなくともー……、ぁー……誰かに非常に好かれていたとか、もしくは誰かを非常に好いていたと言うことは……？」

栄子「それなら……うちでバイトしてるイカ娘のことを好いていま

した、というか心酔していたというか」

古畑「……イカ？　娘ぇ？　あの、今なんて」

栄子「イカ娘です。まあ、あの、私たちもなんて説明したらいいか困る厄介なやつなんですが……ははは」

古畑「その方はイカなんですか？　イカのペットを飼っていらっしゃるとか」

栄子「いえ。イカ娘っていうのはいちおう見た目は人間です。人間でもありイカでもあるというか……」

古畑「あのー……んっふっふぅ、すみません、ちょっと意味がわからないのですが」

栄子「えっと、そのー……。――あ！　来たみたいです。ほらあの白いワンピースと白いイカ帽子の！」

栄子、ビーチの入り口の方を指さす。

古畑「ええ～っと、あー！　あの方ですかぁ！　ずいぶんと奇妙な格好をしているんですねぇっ」

イカ娘「――ゲソ？」

捜査中

【ＡＭ　７時半　海の家れもん周辺】

栄子、手を振ってイカ娘を呼ぶ。

栄子「おーいイカ娘ぇ！　こっちだこっちー！」

イカ娘、栄子たちのところへ歩いていく。

イカ娘「？　いったいなんでゲソ。それにこの警察の数――って、はっ！　しまったでゲソ、寝坊して掃除を忘れていたでゲソ！」

古畑「あのー掃除？」

イカ娘「い、いやなんでもないでゲソ。人間どもが海を汚すから、私は捨てられたゴミを掃除することにしているのでゲソ」

古畑「そうですかー……」

イカ娘「それよりも、この騒ぎはいったいなんでゲソ？」

古畑「ああ～すみません。えーと私、古畑と申します。刑事です。で、あのー……えっとですねぇ、あなたのお友達がここでお亡くなりに。えー、長月早苗さん」

イカ娘「早苗が！？」

古畑「はい、そこのビーチの監視台のふもとに。ご遺体が」

古畑、早苗の遺体の方へ手をむける。

駆け出すイカ娘。

イカ娘「――早苗！　いったい誰がこんなことを！　ひどいでゲソ」

古畑「……」

古畑、今泉の肩を叩き、小声で、

古畑「……ねえ、今泉くん」

今泉「はい、なんですか？」

古畑「彼女、えっとーイカ娘さんって言ったねぇ。あの子に、被害者のこと説明した？」

今泉「いいえっ？　だって彼女、今ここに来たんですから、話すヒマなんてありませんでしたよ」

古畑「おかしいなぁ……。彼女、遺体を見て真っ先に“誰がこんなことを”って言ったよ……？」

今泉「それがどうかしたんですか。僕だって犯人が誰だか知りたいですよ」

古畑「あのね、今泉くん。おかしいでしょう～。遺体はビーチの監視台のふもとにあるんだよ？　それも鑑識がビニルをかけてる。彼女が知ってるのは、今ぱっとビニルをめくって見た被害者の顔だけ。顔にはなぜかイカスミがかかっていたけど、それ以外の外傷は、顔にはとくにないんだ。外傷は圧迫されたお腹だけ。でも彼女はそれを見ていない」

今泉「そうですね」

古畑「“誰がこんなことを”なんてまるで早苗さんが殺人事件の被害者だと知っているかのような言い方じゃないかー。もしかしたら監視台に早苗さんがのぼって、足を滑らせて落っこちた事故かもしれないのに？　突然、ここで心臓発作か何かを起こして亡くなったのかもしれないのに？」

今泉「たしかに、ちょっと引っ掛かりますね」

古畑「ちょっと彼女のことについて調べて」

今泉「はい、わかりました！」

今泉、走ってどこかへ消える。

古畑「あのぅ～……イカ娘さん、でよろしいですか？」

イカ娘「なんでゲソ？」

古畑「あの、いえ、んっふっふぅー。あなた面白い喋り方するんですねぇ、えーっと、そのー、ゲソですか」

イカ娘「そうでゲソが……。まさかバカにしているでゲソか！？」

古畑「いえいえいえー！　めっそうもございません。とてもユニークな方だ。それにその、頭の帽子と、ぁー……髪の毛……ですか？」

イカ娘「これは触手でゲソ。私はイカなのだから触手があるのは当

然じゃなイカ」

古畑「えぇ～……。はい。そうですねえ。とても立派なものをお持ちでぇうふふ～」

イカ娘「はっはっは。話しのわかる刑事さんでゲソね」

古畑「光栄です。ところで、イカ娘さん。あなた、昨晩は何をしていらっしゃいましたか」

イカ娘、少しムッとした顔をする。

イカ娘「わ、私を疑っているでゲソか！？　犯人は私じゃないでゲソ！」

古畑「形式的なものですから、どうかお気になさらないでください」

イカ娘「むー。私はー栄子たちの家で寝泊りをしているでゲソ。昨日も栄子の部屋で寝てたでゲソ」

古畑「栄子さん。海の家の従業員さんですね」

イカ娘「そうでゲソ」

古畑「ずっと家にいましたかー……？　えー夜の二十三時から二時頃」

　イカ娘、目線を逸らしながらごにょごにょと、

イカ娘「その頃は……寝ていたでゲソ」

古畑「寝ていた。あなたも、みなさんも？」

イカ娘「そうでゲソ」

古畑「そうですか。イカ娘さん……あの、事件や早苗さんのことについて幾つかうかがいたいんですけどもね」

イカ娘「いいけど、早めに済ませてくれなイカ？　まだ動揺しているし、海の家の仕事を手伝わなければイカんのでゲソ」

古畑「えぇ、手短に済ませます。あのー、栄子さんから聞いたんですが、あなたー……とーてーも、早苗さんに好かれていたようですね。溺愛されていたと。まあ、女性が女性を好きになってはいけないなんてこと、ありませんからねぇ」

イカ娘「まあ、たしかにそうでゲソね」

古畑「しかし、あなたは早苗さんのことを……愛しては」

イカ娘「それはないでゲソね。むしろ付きまとわれて迷惑していたでゲソ」

古畑「では、早苗さんが死んでもそれほどショックではなかった。なのにあなたは遺体を見てとても悲しそうに――」

イカ娘「それは極端すぎるでゲソ！　たしかに早苗の想いは異常だったけど、だからといって憎んでるわけではないでゲソ！　友達としては嫌いじゃないし、殺されたら悲しいに決まってるじゃなイカ！　とてもショックを受けているのでゲソ！」

古畑「んー、まーたーだ」

イカ娘「？」

古畑「あなた、早苗さんが殺された殺されたと言っていますが、私たちはそんなこと……ひとことも」

イカ娘「……。だ、だって、事件って言ったり、当時何をしてたかなんて聞かれたら、殺人事件だと思うに決まってるじゃなイカ！」

古畑「あなたはそれよりも前からずっとそう言っていましたよ」

イカ娘「そ、それは誤解したんでゲソ。テレビでそういうドラマとかを見るから、なんとなくそう思ったんでゲソ」

古畑「……なるほどーそうですか。納得しました」

イカ娘「まったく――わかってくれればいいのゲソ」

古畑「では、この遺体と、現場の様子についてどう思われますか」

イカ娘「さ、さあ。早苗がかわいそうという感じでゲソ」

古畑「それだけですか、何か気づくことは……」

イカ娘「べつにないでゲソ」

古畑「いえ、そんなはずありませぇん。よーく見てください！　悟郎さんや千鶴さんや栄子さんもすぐ気付いたことですよ？　警戒せず、思ったことをおっしゃってください」

イカ娘、少し返答を渋る。

イカ娘「うー。……イカスミ、でゲソ」

古畑「はい？」

イカ娘「イカスミが目につくでゲソね。監視台にも辺りの砂にもゴミにもイカスミがばらまかれているでゲソ」

古畑「そうですねー。こーれは、かなり目立ちます。ここにも、そこにも、あそこにも。真っ黒です。なんでこんなことになっているんだと思いますかー？」

イカ娘「さぁ……わからんでゲソ」

古畑「発見時の早苗さんは、監視台の足のパイプへ手を伸ばそうとしているような格好をしていたそうです」

イカ娘「それじゃ、パイプを掴もうとしたのかもしれないでゲソね。苦しくて何かをギュッと握りしめるのはよくあることでゲソ。けど途中で力尽きて掴めなかったんでゲソ」

古畑「なるほど。たしかにそうかもしれませーん。それでは、他には何か気づきませんか」

イカ娘「とくに……ないでゲソね。もう仕事に行っていいでゲソか？」

古畑「……はい。ご協力どうもありがとうございました。とても、参考になりました」

お辞儀をする古畑。

イカ娘「それじゃ、私は仕事に入るでゲソ」

古畑「どうぞ頑張ってください」

捜査終了

【ＰＭ　１時　海の家れもん】

海の家。
店内で食事をしている古畑と今泉。
焼きそばを頬張った今泉が話を切りだす。

今泉「美味しいですよ、古畑さん！　ここの焼きそば！　海の家の料理ってたいてい安っぽいですけど、ここのはイケますね！」

古畑「そう。よかったねー」

今泉「古畑さんの頼んだイカスミスパゲッティはどうですか」

古畑「うん？　美味しいよ。味もいいし、すごい新鮮な感じがする」

今泉「さっき店員の渚さんに聞いたんですけどね、ここのイカスミはイカ娘さんのイカスミを使ってるみたいですよ。だから取れ立てで新鮮なんですって！」

古畑「イカ娘さんのスミぃ……？　それ、いったいどういうことー」

今泉「いや、彼女ね、イカなんですよ」

古畑「なんか、そう言ってたねぇ」

今泉「だからスミを吐けるんですって」

古畑「ずーいーぶーんと、イカ気味な人なんだねー……まー、っはっは」

今泉「なんですかイカ気味ってー」

古畑「ちなみにどれくらいイカスミを吐けるのー……？」

今泉「聞いたところによると、かなりの量が出せるみたいですね。限界がくるとゲッソりしちゃうみたいですけど。ゲソだけに、フフフッ」

古畑「くだらないこと言ってんじゃないよ」

古畑、今泉のデコを叩く。

今泉「痛っ。またおデコ叩くー。にしても古畑さん、イカスミの量がどうかしたんですか」

古畑「現場。かなりの量のイカスミがまいてあっただろうー。普通の人間はイカスミなんて持ち歩いてないよ。まくなら、あらかじめ用意していないとダメだ。でも、じゃあ何のためにイカスミを持ってきたのか。そしてまいたのか」

今泉「なにかを隠すために、とか」

古畑「だとしたらもっと違うもの用意するでしょう。イカスミは奇抜すぎるよ。逆に注目されるじゃないか」

今泉「そうですねぇ」

古畑「だから犯人は、最初はイカスミを使う予定なんてなかったんだよ。何かしらの理由で急遽イカスミが必要になった。それも、決してイカスミがベストな選択というわけではなく、んぅー……いわゆる背に腹はかえられぬ。イカスミしか持ち合わせていなかったから、それを仕方なく選んだ」

今泉「そんな、偶然イカスミを持ち合わせてる人なんていわるわけが――……」

古畑「いるだろう？　ひとりだけ」

今泉「いや、でも、まさかあんな素直で明るい良い子が」

古畑「私が出会ってきた殺人犯は誰ひとりして、殺人を犯すような悪人には見えなかったよ」

今泉「そうですけど……」

古畑「それにね、彼女の発言はどうも引っ掛かるところが多いんだ。事情を知らないはずなのに殺人事件だと断定していたり、現場をどう思うか聞いたときも真っ黒い液体を見て、迷わずイカスミと言った。習字で使うような墨汁や、ヘドロとは考えずに迷わずイカスミといったんだよ」

今泉「彼女がイカだから、なんとなくそう思ったんじゃないですかねえ」

古畑「んーまー……それも有り得るけどもねぇ。でもそれだけじゃないんだ。イカスミは目立つから当然だけど、被害者は吐血もしてたんだよ。地面にはイカスミと同様に血もあった。なのにイカスミのことにしか触れずに、血液についてはノータッチだ。まるで血のことについては触れて欲しくないかのように」

今泉「うーん。でもなぁ……」

古畑「ところで、今泉くん。そっちの方でわかったことはあるの」

今泉「ああ、はい。えっとー、まずイカ娘さんの特徴なんですが。さっきも言った通り、彼女はかなりイカとしての性質を兼ね備えていたようですね」

古畑「うーん、どうも理解しにくいんだけど、たとえば」

今泉「触手を自由自在に操れるそうです。そのうえ触手は伸びるうえに、怪力。他にもホタルイカの能力や、イカ帽子のエラのピコピコや、体重のコントロール、スミを吐く。他にも色々あるみたいですね」

古畑「ずいぶん多芸なんだねえ。うーん、可能性がありすぎて、返って推理しにくいなあ……」

今泉「次に……現場にまかれていた黒い液体なんですが、調べた結果、これはやはり正真正銘のイカスミだそうです。ただ、さすがに吐いたイカを特定するのは無理だそうです」

古畑「当たり前だよ」

今泉「イカスミ以外は特に変わった成分は検出されなかったそうです」

古畑「……え。――本当にぃ？　それじゃ、イカスミを拭いたら何か下に文字が書いてあったとかはない？　とくに監視台のパイプとかに」

今泉「いえ、とくに何も」

古畑「うーん、妙だねぇ……。イカスミ以外に何もなかったなら、なんでわざわざ犯人はイカスミをまくような真似をしたのか……。うーん……イカスミの下に、何かあると思ったんだけれどもー……」

今泉「それと……えっと、ああ、これこれ」

今泉、内ポケットから手帳を取り出す。

今泉「被害者の早苗さんの自宅で見つけました。日記帳というかメモ帳というか」

古畑「……中は調べたの？」

今泉「はい。ご両親から許可をいただいて」

古畑「なんて書いてあったー……」

今泉「えーっと、最後のページに書かれていた言葉が“今夜はイカちゃんとウ・フ・フ”」

古畑「どうやら会ってたみたいだねぇ。それで、イカ娘さんのアリバイは……裏は取れたの」

今泉「それが……。千鶴さんやたけるくんはずっと寝ていたからわからないとのことなんですけど、次女の栄子さんがですね、起きてるんですよ。深夜に。どうしてもクリアできないゲームがあったらしくて、いったん寝たものの悔しくて目が覚めちゃって、けっきょく夜中にちょっとだけやったらしいんです」

古畑「そのとき部屋にイカ娘さんは？　栄子さんは、イカ娘さんと一緒の部屋にいるんだよねえ？」

今泉「いなかった、と」

古畑「――そう」

暗転

【暗転】

古畑
「えぇー……今回の犯人はとても素直な人物です。そして海をとても愛していらっしゃる。
彼女はご自身の持つ特殊な能力を用いて殺人を犯し、いえ――犯してしまい、そして証拠の隠滅をはかりました。
そう、犯人はイカ娘さんです。
しかし困ったことに彼女の持つ能力は非現実的であるため、すべてが空想のうえでの推論になってしまい、なかなか彼女が犯人であるという決定的な証拠を得ることができません。
……今回は。ひとつ罠を仕掛けてみようと思います。
彼女はひとつ、大きな誤解をしているんです。そこを突いてみたいと思います。
素直な彼女であれば、うまく引っ掛かってくれるかもしれません。成功するように祈っていてください。
ちなみに、本当のイカ娘さんは殺人なんて犯しませんのでご注意を。……古畑任三郎でした」

解決編

【ＰＭ　８時　海の家れもん】

海の家。
仕事を終えたイカ娘に声をかける古畑。

古畑「え～、イカ娘さぁん。ちょっと、よろしいですかー……？
はい、お仕事お疲れ様でした。どうぞ、そちらにおかけください」

古畑、イカ娘を客席に座らせ、自分も対面側の席に腰掛ける。

イカ娘「なんの用でゲソか？」

古畑「えぇ～……んっふぅふー……。あなた、早苗さんを殺しましたねぇ」

イカ娘「！？　な、なにを言ってるでゲソ！　そ、そそそんなわけないじゃなイカ！」

古畑「えぇ～……イカ娘さん。私はですねぇ、あなたの証言に矛盾

が多すぎることが気になりまして色々と調べさせていただきました。どーしても、一度気になったら隅々までハッキリさせないと納得できない性分でしてねぇ～ふっふー……」

イカ娘「面倒くさい人間でゲソ」

古畑「そーこーで。んっふぅっふ～……。私ですねー、あなたのご友人たちからあなたのことを聞きました。いやぁー、あなたはとてもいいご友人をお持ちだ。みなさん口を揃えて、イカ娘さんはとても素直で明るい良い子だとおっしゃっていました」

イカ娘「ちょ、ちょっと照れくさいでゲソね……」

古畑「そしてぇー……、あなたは実に様々な能力をお持ちのようですねぇ。いやー、私には到底真似のできない凄技をたくさんお持ちのようで。素晴らしい限りだ」

イカ娘「はっはっは。当然じゃなイカ！」

古畑「――しかしぃ。……それで、謎がすべて解けました」

イカ娘「……」

古畑「まずはですねぇ……明かり、です。ぅー、事件のあったとされる時間。そのときは真夜中でぇ、そのうえ空は曇っていた。当然、街灯のないビーチは真っ暗で何も見えません」

イカ娘「そうでゲソね」

古畑「では、どうして犯人は早苗さんを殺害で、き、た、の、か。おかしいですよねー……真っ暗で何も見えなくては、早苗さんを殺すどころか、見つけることもできません。狙いを定めて一撃で殺すなんて不可能でしょう」

イカ娘「たしかにそうでゲソね」

古畑「えー……、イカ娘さぁん。あ、な、た。ホタルイカのように身体を発光させる能力を持っているそうですね。ピカァーッとー」

イカ娘「うっ。……ま、まぁ。持ってるでゲソ」

古畑「あなたは、自分の身体を光らせることでぇ、それを明かりの代わりにしたんです」

イカ娘「そ、そんなの可能性のひとつに過ぎないでゲソ。犯人は懐

中電灯を持ってきていたかもしれないじゃなイカ！」

古畑「なるほど……たしかにそうです。えー……次に！」

イカ娘「今度はなんでゲソ」

古畑「検死によると、早苗さんの死因は腹部を非常に重い物で押しつぶされたことによる圧迫死だったそうです。大量に吐血していました。血がべっとり、と。ちなみに鼻血も出していましたがこれは別の原因でしょう。……えぇー……そう、凶器の重さはぁ～、最低でも百キロは必要でしょうっ。しかし……このビーチにはそんな重そうな物は見当たりません」

イカ娘「犯人が持ち去ったのかもしれないでゲソ」

古畑「果たしてそうでしょうかー……ぁー……人を圧迫死させるほどの重たい物を、一刻も早く犯行現場から立ち去りたい犯人が、わざわざ運んで帰るはずはありません。よほどの理由がない限り！逃走に時間がかかって、誰かに見つかるかもしれなぁい。……普通はその場にぃ、置いていきます」

イカ娘「なら、よほどの理由があったんでゲソね」

古畑「いいえ……理由はありません。しかし持ち帰った……では何を、どうやって。……実はですね、犯人には凶器を持ち去る、持ち去らないという選択肢はなかったんです。犯人が去ること、それはそのまま凶器を持ち去ることに直結するんです。それは……犯人自身が、凶器だったから」

イカ娘「！」

古畑「え～……あなたのぉ、両腕のぉ、腕輪ー」

イカ娘「う……」

古畑「あなた、腕のリングを操作することで、体重が変えられるそうですねぇ！？」

イカ娘「そ、そうでゲソ」

古畑「とても軽くすることもできればー、非常に重たくすることもできるぅ……？」

イカ娘「そうでゲソ」

古畑「ボディープレスすれば人を圧迫死させるくらいに」

イカ娘「できる……でゲソ」

古畑「はい」

イカ娘「で、でもそんなものは憶測でゲソ！　証拠がないじゃなイカ！」

古畑「んっふっふぅ……。わかりました。証拠をお教えしましょう。えー……証拠はぁー……、イカスミです。犯行現場にまき散らされていたイカスミ」

イカ娘「まさか私がイカスミを吐けるから犯人だとでも言うのでゲソか！？　そんなの言いがかりにも程があるじゃなイカ！　さすがの私もイカるでゲソ！」

古畑「早苗さんの顔にはイカスミがかかっていました。おそらく、あなたが早苗さんの目をくらますためにかけたんでしょう。そして、早苗さんが動けなくなった隙に、監視台の上から……体重を重くして、ドン」

イカ娘「そ、そんなのあらかじめビニール袋に墨を入れて持ってきてたのかもしれないでゲソ。真犯人が私に罪をなすりつけようとしたんじゃなイカ！？」

古畑「いいえー。私が言いたいことは、イカスミを誰が吐いたのかではなく、なぜ吐いたのかです」

イカ娘「どういう意味でゲソ。目くらましじゃなかったのでゲソ？」

古畑「たしかにそうですが、もうひとつ理由があるんです。イカスミが現場にまかれていた理由が。……えー……体重を重くしたあなたにボディープレスをされた早苗さんは、吐血するほどの致命傷を追いましたが、すぐには死にませんでした。残された力を振り絞って、ダイイングメッセージを書いたんです。近くにあった監視台のパイプに、あなたが犯人であることを示すメッセージを」

イカ娘「……」

古畑「しかし不幸なことに、ダイイングメッセージを書き残したことがあなたに気づかれてしまいました。……彼女が息絶えたあと、あなたはダイイングメッセージを消すために、イカスミを上からかけて塗りつぶしたんです。周囲にもまき散らしたのは、イカスミがかかっているのが一カ所だけだと怪しまれると思ったからでしょう」

イカ娘「デタラメでゲソ！　適当なことを並べ立てて強引に犯人に仕立てあげようとするなんてイカんでゲソ！　私が早苗の書いたダイイングメッセージを消したなんて真っ赤なウソでゲソ！」

古畑「あなたが消したー……。あなたが、殺した」

イカ娘「む、無茶苦茶でゲソ！　いくら私がイカスミを吐けるからって早苗が血で書いたダイイングメッセージの上から、私がイカスミで上書きして消したなんて妄想もいいとこでゲソ！」

古畑「血ぃ～？　今、あなた血って言いましたね？　早苗さんは指についていた血でダイイングメッセージを書いたと。ねっ聞いてたぁー？　今泉くーん？」

今泉「はい聞きました！　古畑さぁん！」

イカ娘「このデコはどっから出てきたでゲソ！」

古畑「……あなた、どうして早苗さんの手についていたのが血だと思ったんですかー。私は血で書いたなんてひとことも言いませんでしたよぉ……っんふぅ～」

イカ娘「そ、それは、今朝、死体を見たときに指に血がついていたから……でゲソ」

古畑「血が～……手についていたぁ……？　いいえ、違います。それはウ、ソです。遺体にはビニルがかけてありました。手はあなたには見えなかったはずです」

イカ娘「ちゃんとかかってなくて、隙間から――」

古畑「見えた。ちらりと？」

イカ娘「そうでゲソ。ビニルの隙間から見えたのでゲソ」

古畑「本当ですかー？　血のついた指が」

イカ娘「そうでゲソ。真っ赤な血がべっとりと付いてたでゲソ」

古畑「真っ赤な！　血がぁ？」

イカ娘「そうでゲソ！　しつこいでゲソ！　いい加減にしなイカ！」

古畑「イカ娘さぁん。そもそも、どうしてダイイングメッセージが血で書かかれたとお思いに？　私はたしかに早苗さんが監視台のパイプにダイイングメッセージを残したと言いました！　しかし！　血で書いたとはひとことも言っていなぁい！　ダイイングメッセージはイカスミで塗り潰されていました。ぱっと見ただけでは、なにで書かれてたのかなんてわかるはずないんです！　見ることができたのは、塗りつぶした犯人だけなんですっ」

イカ娘「だ、だからさっきから何度も言ってるじゃなイカ！　今朝見た早苗の死体の指に真っ赤な血がついていたんでゲソ！　だから血で書いたと思ったんでゲソ！　手に血が付いてたのだから、誰だってそれでメッセージを書いたと思うに決まってるじゃなイカ！」

古畑「それは、有り得ません」

イカ娘「？」

古畑、内ポケットから写真を一枚取りだす。

古畑「これぇー……。ご覧ください。少々刺激が強いですがどうかご容赦を。えー、現場検証の際に鑑識が撮った写真です。ここ。早苗さんの指を、見てください」

イカ娘「いったいなんでゲソ……」

写真を確認するイカ娘。

イカ娘「……そんな。……ゆ、指が真っ黒でゲソ」

古畑「そうなんです。これは真っ赤な血ではありません！　真っ黒なイカスミです！　誰がどう見ても真っ黒です。血なんて一滴もついてません！　たしかに血は時間が経つと黒っぽく変色もしますが、このサラサラ具合と汚れ方、それに現場にはイカスミがまかれていたということを考えれば、これがイカスミであると思うのが自然です！」

イカ娘「……」

古畑「誰がどう見ても“これは墨じゃなイカ？”と答えるはずです！　現に悟郎さんにも千鶴さんにも栄子さんにも渚さんにもシンディーさんにも三バカトリオにも同じものを見せましたが、みなさん口を揃えて、これは墨だとお答えになりました！　んっふっふっふぅ～……なのにあなただけは、これを血だと言い張った」

イカ娘「そんな……なんで血じゃなくてイカスミになってるのでゲソ……？」

古畑「なぜ、あなたはこれを血だと思ったのか……。簡単なことです。えー犯行時刻は真夜中です。真っ暗で何も見えません。ホタルイカの能力で発光して明かりを得たとしても限度があります。色の

判別まではできないでしょう」

イカ娘「……」

古畑「早苗さんはボディープレスをされたときに、たしかに吐血しました。あなたもそれに気づいた。そして、早苗さんはこっそりダイイングメッセージを書いていた。だからあなたはこう思ったんです。早苗さんは自分の吐いた血を使ってダイイングメッセージを書いたのだ、と」

イカ娘「……」

古畑「しかし実際は、早苗さんは自分の顔についていたイカスミを指につけて、書いたんです。……そう。これは～……あなたが早苗さんに目くらましをさせるときに吐いたイカスミなんです。その証拠に、鑑識の結果、監視台のパイプからはイカスミ以外の成分は検出されませんでした」

イカ娘「……」

古畑「早苗さんはイカスミを使ってダイイングメッセージを書いたんです。彼女がイカスミを選んだのは、きっとあなたを愛していたから。最後の最後まであなたに関係あるものに触れていたかったのでしょう」

イカ娘「そんな……」

古畑「犯行時、ビーチは真っ暗でしたからね～、イカスミは当然黒ですが……血も、黒く見えます。どちらがどちらかなんて判別は、つきません。あなた、イカスミを血だと勘違いしましたねぇ～んっふぅー」

イカ娘「……」

古畑「早苗さんの手には血なんてまったくついていませんでした。……早苗さんの手に血がついていると勘違いできるのは、犯行時に現場にいて、早苗さんがダイイングメッセージを書く直前に吐血したのを見ていて、暗くて色の認識ができなかった犯人だけなんです。そしてそれが、あーなーたーです。……まだ続けますか」

イカ娘「……。……こ、殺すつもりは、なかったんでゲソ。海を汚したことをこらしめようと思っただけだったのでゲソ」

古畑「はい……。んっふっふー……早苗さんが人間だったのがいけませんでした。あなたと同じように彼女がイカなら、吐血しても吐くのは血ではなく、イカスミだったでしょう。あなたも勘違いせずに、済みました」

イカ娘「スミだけに“済み”ました……じゃないでゲソー！」

古畑「お察しします」

古畑、席を立ち、手を差し出す。

古畑「行きましょうか」

古畑の手をとり立ち上がるイカ娘。

イカ娘「刑事さん。……どうやら私の地上侵略はとうぶん先になってしまうようでゲソね」

古畑「え～……言い難いのですがぁ……。おそらく、その日はー……一生、こないでしょう！」

ニコリとほほ笑む古畑。
イカ娘、無言で海の家を去る。

――　ｆｉｎ　――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1237y/

『古畑任三郎VSイカ娘』

2011年11月17日21時33分発行